

第4回「都市と農村の協働の推進に関する研究会」議事概要

日時：平成20年7月16日（水）午前9時30分～11時

場所：農林水産省第2特別会議室

議題：

- 1 研究会とりまとめ（案）の議論
- 2 その他

委員の主な意見

- ・とりまとめ（案）には2つの大きな意義がある。1つ目は、NPO、企業、大学などの主体もそれぞれに多様で、様々な機能を持っていることを明らかにした点。2つ目は、都市と農村という2つのプレイヤーに加え、コーディネイターという3つ目のプレイヤーが存在することを明らかにした点。
- ・コーディネイターへの表彰は、その役割を世間に訴え、若い人に憧れを持ってもらうものであり、大きな意味を持つ。省庁を越えて取り組んでもらいたい。
- ・学生が休学する場合、授業料を半額納めなければならないという制度がある。都市と農村のコーディネイターとして働くことを目的として休学する場合、全額免除にする制度が出来ないか。
- ・農村側のコーディネイターには、農業生産法人の職員も含まれるのではないか。同様に、都市側のコーディネイターとして生協の役割も重要である。
- ・コーディネイターとして最も大きな力を発揮しているのは役所の職員であるのが現場の感覚。この職員が合併等の影響で早期退職している例がかなりある。こうした人たちが、地域活性化を果たしているNPOの中核になるような手助けが出来ると良い。
- ・大学とNPOは地域で行うワークショップのスキルを持っているのが強みである。ワークショップ型の会議が普及していけば、自治の形態を変える可能性すらある。
- ・大学もNPOも地域の信頼を得るにはかなりの時間がかかる。その意味で、信頼性の高い機関によるアドバイザー派遣制度は有効である。
- ・コーディネイターという呼び名は様々なジャンルに見られることから、都市と農村を繋ぐコーディネイターに覚えやすい名称を一般公募などにより付けてはどうか。例えば、「むらまち結び人」など。
- ・農業フェアなどの都市部のイベントに集まる若者は、以前は、農業をやりたいという明確な願望を持った者が多かったが、最近は、単に田舎で暮らしたいと

か自然と触れ合いたいという漠然な想いを持つ若者、特に女性や結婚していないペアなどが増えてきた。この動きを見ていると、コーディネイターの役割は重要になってきていると感じる。

- ・最初のうちは協働の取組も熱心に行うが、2～3年後に熱が少し冷めてきてから、いかにして取組を継続させるかが大事である。農村の人達は、「今は来てくれているけど、都合が悪くなれば来ないでしょ」と感じている。
- ・地域再生に農業政策をうまくからませることで、もう少し広い視野の政策の展開が可能となろう。
- ・普及指導員はコーディネイターの核として存在していたが、数が減っているようだ。普及員の展望についても検討していただきたい。
- ・この報告書に掲げられた施策の財政支援や人的支援についてどのように考えているのか。
- ・ベジタブルマイスターなどに若い人が飛びつく現象は、一種流行的なものであり、都市と農村の協働のコーディネイターがこの流れに埋没してしまわないように検証してもらいたい。
- ・コーディネイターとして活動したい人が学んだり、同じ目標を持つ者と語り合える場を作って欲しい。
- ・コーディネイターは総合力が重要。地域全体を知った上でのコーディネイターが非常に重要。
- ・今、地方財政は非常に厳しい状況にあるが、農山村には中山間直接支払い制度とか農地・水・環境対策など、集落でお金をプールできる施策がある。これを利用して農村振興につながる仕組みを作り、伸ばしてもらいたい。
- ・青年海外協力隊ではなく、青年「国内」農業協力隊に国を挙げて取り組んでいただき、若者の育成に取り組んでいただきたい。

以上